

聖書信仰の民族的表現

ガブリエル・ゲフェン

Kesher: A Journal of Messianic Judaism 21号

2007年夏/秋号掲載

International Journal of Frontier Missiology 24号

2007年夏号掲載

イスラエルの主である神はすべての人類をご自分に似せて創造されました。主は私たちが様々な言語で分け、そして世界中に分散させました。私たちは、それぞれの地域で生存するための必要な知識と知恵を、それぞれの民に与えられました。主の御手は、それぞれの民の歴史において常に共にありました。

神なき民はいません。彼らは主を知らないかもしれませんが、また主に仕えていないかもしれませんが。しかし、主はいつも彼らの中におられます。ほとんどの生活や信仰の基本的な表現は神から与えられたものです。私たちはそれを適切に使っていないかもしれませんが、また、私たちが意図してそれを使って主を讃えていないかもしれません。しかし、そうだからとはいえ、彼らが本質的に罪深い、または聖書的でない、という事ではありません。単純に私たちはそれを誤用しているにすぎません。

すべての民と土地には独特の特性と、それに対応する独特な表現があります。私たちの創造主は私たちとそれらの土地をご自分の栄光のために造られました。地上すべては主の栄光に満ちています。主は、ご自分の創造物の中で、またはそれを通して、私たちによって奉仕され、そして礼拝されることを望んでおられます。

言語と土地の分断

さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。そのころ、人々は東のほうから移

動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作ってよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」その時主は人間の建てた町と塔をご覧になるため降りて来られた。主は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことを始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。」こうして主は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てのをやめた。それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。主が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、主が人々をそこから地の全面に散らしたからである。(創世記11:1-9)

ノアと大洪水から数世代後、全人類は一つの民、一つの言語でまだまとまっていた。そのような一致の中で、この一つの民は、神ではなく自分自身の名声と栄光のために集まって塔を作りました。彼らは、神ではなく、人によって作られた大建造物を、彼らの一致を確認するものとししました。私たちは、主はそれが彼らをどこに導くかをご覧になり、それを防ぐために介入されたことを教えられています。主はさらに、人類を異なった民、異なった言語に分け、そして地上の全面に分散されました。

そうしたからといって、これは人の失敗による罰という意味ではありません。覚えておられるかと思いますが、大洪水に続いて、ノアとその息子達に、「地に満ちよ」という命令が下されています。(創世記9:1) すなわち、人類の四方への分散は神の

意図でありました。それは主の計画の一つであり、罪に対する罰ではありませんでした。

その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大勢の群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手を持って、御座と小羊との前に立っていた。彼らは大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」(黙示録7:9-10)

創世記では、主は人類を異なった民、異なった言語に分けて世界中に四散させました。黙示録では、主がいつしか私たちを連れ戻して主にあつて一つとなり、そして一つになって主を礼拝するのを見る事になりますが、その時は、主が分散した時、主が私たちをそう造られたように、それぞれの言語を持つ固有の民族性を維持したままであります。

すなわち、主は私たちを世界の四方に分散させるのをお選びになりました。そして、私たちが分散していく中で、地上の様々な地域で、独自の生活をして行きました。ある者は非常に暑い場所に住み着き、ある者は非常に寒い所でした。ある者は湿度の高い所に住み、ある者は乾燥した所に住みました。ある者は非常に高地に住み、ある者は海拔と同じかあるいはそれ以下の土地に住み着きました。ある者は赤道近くの地域にやってきて住み着きました。そこは年間を通じて12時間の光と12時間の闇がある所でした。ある者は赤道から遠く離れた場所に住み着き、そこは季節が非常に異なっており、太陽が何週間も昇らない、または暮れない極端な場所でした。これらの場所の環境で生き延びるためには、気候と植生、そして動物の生態について、非常に異なった知識と技能を持つ必要があります。しかし、私たちの創造主は、各民族集団を特定の場所に送り込み、主

の僕として委任し、主は彼らにそこで暮らすための知識と知恵を与えました。

私たちが自分の場所で暮らすためにやってきて、それぞれ別れて暮らした時、それぞれの民族集団は異なった歴史の中生き延びてきました。ある者は他民族の近くに住み、何世紀にも渡り不一致と戦いに陥り、多くの流血と苦しみを被りました。他の集団は別の集団と常に仲良くし、何世紀にも渡って平和に暮らしました。ある集団は常に他の集団との交流があり、別の集団は完全な孤立の中暮らしました。ほとんどの民族は自然災害—破壊的な洪水、地震、台風や大火災などを経験しました。ある者は頻繁に経験し、ある者はほとんど経験しませんでした。

それぞれの民族は歴史の中で、絶頂期と衰退期、最も良かった時と最も悪かった時を覚えています。彼らは子どもたちにそれを教えています。私たちは自分の歴史を、物語を通して子どもたちに人生の基本原則を教えます。私たちは、自分の民の中で最良の、そして最悪の人物を覚えており、片方を尊び、片方を軽蔑します。私たちは、私たちの住む環境の中でどのように維持し豊かになるかという、神から与えられた知恵を持つ人物について覚え、讃え、そして様々な成功と勝利に導いた人物を讃えます。

非常に異なった環境と異なる歴史の中で生活していく過程で、私たちは自分たちの土地の季節にそった固有のお祭りを発達させました。固有な生活環境は、人の生涯過程の出来事の中で、自分の民と共有する遺産の独特な特徴を表現します。

イスラエルの子ともたちもまた、ある地に導かれました。私たちユダヤ人はアブラハム、イサク、ヤコブを通して約束された土地を委任されました。この土地に連れ戻したモーセは、生活と信仰の表

現についての理解が与えられ、それを私たちに教えました。これらの理解と表現は、後に私たちの父祖イスラエルにちなんでつけられたこの場所に対して特に関連したものでした。モーセが教えた習慣や伝統は私たちの民の集団的歴史に直接関係するものでした。私たちはこれらの表現を与えられただけでなく、それを守るよう命令されました。

イスラエルの巡礼祭

イスラエルの祭りの中で、3つの巡礼祭があります。それらはペサハ(過越の祭)、シャヴオット(七週の祭、ペンテコステ)、そしてスッコート(仮庵の祭)です。これらは最も中心となる祭りで、祭りの時イスラエルの民はエルサレムにある神殿に巡礼するよう命令されています。これら3つの祭りそれぞれはイスラエルの民の特定の歴史に完全に関連しており、そして、私たちの住むイスラエルの地の農耕サイクルに関連しています。これらすべて3つの祭りは私たちの歴史や土地と分けることはできません。

現代、3つの祭りを守る主な理由は、それを覚えて子どもたちに教えるためです。過越はエジプトでの奴隷からの解放を覚える時です。私たちは過越の小羊、門柱に塗られた血、そして初子の死を覚えています。私たちがどう解放されたのかを子どもたちに教えるのです。

50日後、シャヴオット(七週の祭、ペンテコステ)は神がシナイ山で私たちと会見された事を覚えるのです。主は御言葉をそこで与え、契約を通して私たちに強め、主との新しい関係を通して新しい将来を作り出して下さいました。

スッコート(仮庵の祭)は、私たちが40年間定住地なく荒野でさまよい、一時的な住まいに住んだ事を覚えるためのものです。主が約束の土地に導

いて下さっただけでなく、より定住の住まいを作ることが可能にして下さった事、そして、その土地にご自身の休息の地として主が選んで、私たちと共に住んで下さった事を祝うのです。主の実体のあるご臨在は、据えられた神殿に住まわり、それは一時的な幕屋の代替となるものでした。

3つの巡礼祭はまたイスラエルの土地の農耕サイクルにも関係しています。ペサハは春の祭りで収穫祭の始めを記念するものです。過越の祭の間私たちが食べる種を入れないパンは、それは前期の収穫で得られた小麦で作られました。種を入れないパンの祭りの間、過越の食事の2日後に、最初の穀物に鎌が入れられた後、最初の束が主の前に捧げられます。

50日後、シャヴオットは収穫の第一段階を終えるのを祝います。初穂の祭りで、新しく収穫した大麦で作られた最初のパンが神に捧げられます。

秋に、スッコートですべての収穫の完成を祝います。それは収穫の祭りで、すべての収穫物が畑から集められた後に行われます。

イスラエルでもそうですが、他の民も自分の歴史や居住する土地に完全に関連した祭りを持っています。彼らもまた歴史を覚え、そして子どもたちに教えます。彼らもまた年間の季節を覚え、彼らが住む場所の収穫を記念します。そして、彼らはそれを続けて行うべきです。お一人である神、私たちのすべての父、そして主の御子を知り、従う者は皆、自分の民の生活と土地を記念し続けるべきであります。彼らは自分の成功を祝い、自分の失敗を決して忘れないようにすべきです。

アマゾンのジャングルにある熱帯雨林の少数民族の男性または女性がイエシュアに信仰を持った時、彼らは突然自分の歴史を失いません。彼らは突然中東に転送されて新しい土地に住むわけではありません。信者は熱帯雨林の人として留ま

り、その土地に適した生活と、自分の民の物語を生きるのです。彼らが熱帯雨林を切り開いて焼き、小麦を栽培してイスラエルの収穫サイクルに合わせるべきと、皆さんの中で真剣に考える人がいるでしょうか。もちろんそうではありません。しかし、彼らが信仰者として自分の土地と歴史を、自分の民と共に尊重し続けることの重要性を、私たちは理解し肯定しなければなりません。

イスラエルの3つの巡礼祭はすべて、諸国が共有している新しい契約での将来の成就を目指しています。ペサハの間、イエシュアは私たちの超越の小羊となりました。シャヴオートの間、最初の使節(使徒)は神の聖霊によって力を得て、世界の収穫の畑に出て行きました。スッコートはまだ来ていない将来の収穫の完成—諸国の大収穫について語っています。

聖書の中で、諸国がイスラエルの祭りを祝えという命令はどこにもありません。預言者ゼカリヤの書(14:16-19)の一カ所に、終わりの日々にすべて地上の国々は、スッコートの時期に代表を毎年エルサレムに送ることが書かれています。この箇所には、その時に国々はスッコートを祝うという事は書かれておらず、単に各国の代表がエルサレムに行くという事だけ書かれています。ある人は、その日諸国の民がエルサレムに代表として集まる重要性は、諸国の大収穫の成就を表すと信じる人もいます。

新しい信者は養子となり、アブラハムを通して構築された信仰の家族の中に「挿し木」されます。この共和国に養子とされた時、すべての信者が受け継ぐべき豊かな霊的遺産があります。この遺産には、イスラエルを通して最初に人類に与えられた神の御言葉があります。この中にはまたイスラエルの祭りの中で体現され、予表された贖いの原則の多くが含まれます。

諸国の中の人々でイスラエルの祭りを祝う事や伝統について共有したい方は、歓迎致しますが、必ず行わなければならないものではありません。彼らはもしそれを行う事を選んだ場合、自由に行う事ができますが、異邦人への使徒であったパウロは明確に、彼らがそれを守る義務について反対しています。彼はそれらの義務から、諸国の人々を解放しただけでなく、イスラエルのこれらの事について取り込む事について注意を与えています。それらの祝祭を経験する事について大いに学ぶところがありますが、それらの表現や伝統が、自分が生活している民の中での生活の表現と入れ替わったりしないように気をつけるべきであります。彼らは自分の文化的遺産を尊重すべきであります。

生活表現の多様性

文化とは何でしょう。それは私たちが話す言語です。それは音楽や踊りです。それは私たちが着る服であり食べる物です。文化とは自分の民と共有する歴史です。それは年、季節、そして自然を祝うものです。それは家族や愛する人と共有する生活サイクルです。それは人々が一緒に管理する土地です。人々が互いに伝達するための、参照する共通点です。これらすべてのものが文化を構成します。これらは、部族や国家の構成員が生活の中で共有する枠組みです。

人類すべては神のかたちに造られています。すべての人の霊、魂、そして体に、創造主ご自身の何かを刷り込みました。人類が創造主を求める時、その方法は何か主から遺産として受け継いだものがあります。それは私たちのそれぞれの中にある切望が、私たちの源である主にまで記憶をさかのぼらせるのです。

すべての人はノアから出ました。大洪水の後、彼の息子たちは地に増え広がり父祖となりました。どの人種もこの同じ父祖を共有し、この父祖は私

たちすべてにとっての唯一の神であり創造主であります。世界中で様々な文化が発達していく中、彼らは共通する起源から枝分かれていきました。ほとんどの文化には、創造主が世界を造ったという伝統的な考え方を持っています。多くの文化には大洪水の物語を持っています。すべての文化は色とりどりで多様ですが、その中にまだ共有する系があり、それは同じ始まりを表現し、そして究極的には同じ将来を共有するのです。

すべての文化には強みと弱みがあります。すべての文化はまた人類の罪によって汚れています。例えば、聖書の中でイスラエルに対して委託された多くの文化的表現であっても、時間と共に自尊心や不遜によって汚れてしまいました。しかし、私たちが自分の文化の中の不完全な所を発見すると、それに対する反応としてそれをすべて拒絶するのではなく、損なわれてしまったものをどのようにして清め、贖えるかを求める必要があります。かつては不正に使用されていたものを、捨ててしまうのではなく、どうやったら適切な使用に回復させることができるかを求めるべきです。私たちはまた、十分に使う事を怠ってきた、私たちの文化の中に潜む固有の贖いの力を発見できるよう求めるべきです。

全部とは言いませんが、ほとんどの文化には楽器があります。それらは人生の物語や愛の歌を歌うために使われました。あるものはまた礼拝や宗教的例祭の時に使われました。例祭のために楽器が作られる時、創作者は一般的に自分が信じている霊(偶像や祖先、神々を含む)、あるいはそれぞれの理解している創造主に対して何らかの方法で捧げます。そのような背景から来た人がイエシュアに信仰を持った時、彼らは自分の民のために続けて楽器を作るべきです。新しい太鼓や横笛、あるいは彼らが演奏するどんな楽器でも作り、それを主に捧げるのです。そのようにすることによって、彼らは主を創造主と呼び続ける事がで

き、しかも誰が真の創造者であるか、という新しい理解を持つのです。

というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。なぜなら、神について知りうることは、彼らに明らかであるからです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本姓、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうものの形に似た物と代えてしまいました。それゆえ、神は、彼らとその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。(ローマ1:18-25)

部族集団の中で多くの信者が手で新しい楽器を作り、自分の民の伝統的な衣装を作ってそれをイエシュアに捧げている人がいます。伝統的な物は、元は先祖や霊、または偶像に対して栄誉をもたらすために作られましたが、それをイスラエルの神に栄誉をもたらすために作られているのです。かつて、創造主ではなく創られた物を神として使用された物が、適切な使用に回復しました。ある人がそれらの楽器を使って主に対して演奏された時、主はその人の心をご覧になり、その楽器の形をご覧になるわけではありません。ある特定の太

鼓が間違っただけで使われていた、または間違っただけで存在に対して使われていたという事は、なにもそれが罪深い、そして聖書的でないものを受け継いでいる、という事にはならないのです。それは、単に間違っただけなのです。それが適切な、敬虔な、そして「聖書的な」使い方に回復するように求め、それは聖書に反する事ではありません。

イエシュアを信じる新しい信者が、自分の民の文化遺産を捨てるように教えた場合、何か非常に貴重な物がその人から奪われてしまいます。そのような共有される生活表現を拒絶する事によって、自分の共同体の中で自分を孤立させ、自分の回りの中で関係が薄くなってしまいます。彼らは、自分の民が愛や栄誉や敬意を互いに表現する最も基本的な伝達の道具を失ってしまうのです。彼らは自分の愛や神の愛を、自分の家族や愛する人に効果的に伝えるのを不可能にしてしまいます。文化とは、民の全体の部分であるため、それを拒絶するという事は、その民を拒絶することに他ならないのです。

ユダヤ人の男性または女性がイエシュアにあって新しい契約を受容した時、彼らはユダヤ人であることをやめたことにはなりません。彼らはまた突然50%ユダヤ人で50%メシアニック(メシア、あるいはキリストに従う者)に変形するわけではありません。彼らは100%ユダヤ人で、また100%メシアニックのまま残るべきなのです。

アオテアロア(ニュージーランド)にいるマオリの男または女がメシアであるイエシュアによって生まれ変わった時、彼らはマオリをやめたわけでもなく、また50%マオリで50%メシアニック(クリスチャン)に変形したわけではありません。彼らは100%マオリのままであり、同時にまた100%メシアに従う信者となるのです。そこには矛盾がありません。

最近、私のモホーク族の友人から、彼がクリスチャンとしてモホーク文化を使っているのに不快感をしめした人から指摘されたということを知りました。「モホークである事が、どのようにしてあなたをより良いクリスチャンにするのか？」と彼はその人から言われました。彼はより良い表現で反論しました。「どのようにしてイエスは私をより良いモホークにするのか？」

エルサレム会議

使徒行伝の中で、初期の使徒たちの中で論争が生じた事が書かれています。彼らは異邦人が割礼を受けないまま、聖書の信仰に入りイエシュアに従っている事を聞き始めたのです。それらの報告によると、新しい信者は水に浸され(洗礼)、そしてさらに聖霊に満たされたという事です。エルサレムにいるリーダー達には想像つきませんでした。何と！無割礼の異邦人がイエシュアを信じて聖霊に満たされた。どうしてそのような事が起こりえるのか。そこで疑問が湧いてきました。「異邦人がまずユダヤ人にならずに、救われる事があるのだろうか。」使徒行伝15章にはこの問題について使徒や弟子達がエルサレムに集まって会議を開いている記述があります。彼らが語り、祈り、共に主に求めた時、彼らが一致して理解したのは、異邦人が神に立ち返るのに、ユダヤ人となる必要はないという事でした。彼らは、贖いのメッセージはすべての人類に対するものであると見始めたのです。パウロは自分の書いた書簡で、異邦人は召命を受けた時のまま留まる方が実際良い事であり、ユダヤ人になる試みをしないと確認しています。

福音の広がりや国々に広がり、急激に発展しました。それから2世代ほど後、信者の大半だけでなく、信じるリーダー達の大半が非ユダヤ人となりました。異邦人の中で信じる共同体が増える中、信仰表現はよりユダヤ色が減っていきました。そ

れは、使徒15章で使徒達が理解している通りでした。

時間が経つにつれ、教会での表現がよりユダヤ色が薄れただけでなく、教会のユダヤ起源から独立を主張し始め、教会とイスラエルと置き換える事を教え始めました。教会史の最初の300年間、いくつもの会談や宗教会議が開かれました。これらの集まりは、リーダー達が討論、決定、そして教会教義を布告と実践に移す目的のために招集されました。ある集まりは地域的で、その地域の不一致を解決するためでした。ある会談は複数の地域からの権威者と、または複数のキリスト流派を代表する人々が含まれていました。しかし、紀元325年になるまで、すべての組織化された教会や地域の権威者、それには318人の司教も含まれていましたが、彼らが一同に招集された最初の会談は開かれませんでした。ニカヤ会談はコンスタンティン皇帝によって招集がかけられ325年に開かれたのが、我々が知るところの7つの全世界キリスト会談と呼ばれるものです。462年に渡って最初と7つ目の会談がニカヤで開催されました。これらの会談で布告された教会法が、教会の教義の基礎となり、ほとんどすべてのキリスト運動は其上に築かれているのです。現代の、ほとんどのプロテスタント教会のプロテスタント達も、これらの会談の神学と実践を基礎としています。

最初のニカヤ会談の結論として、コンスタンティンは紹介文を書き、それぞれの地に帰って行く教会指導者達にそれが渡され、それには教会法がコピーされていました。この手紙の中で、コンスタンティンは、教会はユダヤ人とのすべての関係とつながりから離れるよう宣言しています。彼はまたイエシュアの復活の祝祭は、完全に、また例外なく過越の祭りから離れるよう宣告しています。

「我々は決して、すなわち、ユダヤ人とは何

の共有があってはならない。それは、救い主は私たちに別の方法をお示しになったからである。愛する兄弟達よ、私たちは、憎悪すべき集団であるユダヤ人と分離することを強く希望する。どのように、このようなユダヤ人、過ちによって盲目となった彼らに従えるだろうか。しかしそうでなかったとしても、このような邪悪な人々(ユダヤ人)と交わる事によって自分たちの魂が汚されないようにする義務があなたがたにある。主の殺人者である彼らとは何の共有があってはならない事は、私たちの義務である。私たちの全会一致の判断において、最も聖なる祭りであるイースターは、どこに行ってもまったくの同じ日に祝われなければならないし、それほどまでに聖なる日であるならば、それに対して分裂はあってはならないと判断した。これが、今回決定された件であるならば、この神性な恩恵、そしてこれらの真の神聖なる命令を喜んで受け取られよ。すべて、司祭達が集まる集会で行われた事は、神のご意志から出たものとして考慮すべきである。神の力は、悪魔の悪しき計画を破壊するために、私たちを手段として用いられるのである。」(Nicene and Post-Nicene Fathers, Series II, Vol. XIV: The Seven Ecumenical Councils. Edinburgh: T & T Clark, 1980.)

ユダヤ人に対するこれらの宣告はそれ以前の会談でも行われました。しかし、この最初の全世界キリスト会談による結論によって、これらの布告が組織化された教会すべてにおいて最終的に権限をもたらしたのです。

信仰の新しい表現

それによって、イエシュアの復活を記念する日は小アジアですでに存在していた春の例祭と関連付けられました。それは女神イシュタルに対する

血の犠牲が含まれるもので、イースターはそこから来ました。これは春の新しい命を祝うための、多産を祝う祭りでした。それには、新しい命を代表するシンボルとして、タマゴやひよこ、ウサギなどが含まれていました。この祭りがクリスチャンによって、イエシュアの復活を記念するために祝い始めた時、血の犠牲は廃止され、新しい命のシンボルは、メシアによって得た新しい命を象徴するものとなりました。

小アジアやヨーロッパ東南部にいる非ユダヤ人クリスチャンにとって、存在する祭りをイエシュアの復活として贖う事は決して間違いではありません。コンスタンティンの罪は、ユダヤ人との関係を壊し、分離するという彼の意図にあります。現在のヨーロッパにいる真のクリスチャンがイースターを祝う時、彼らは偶像を礼拝していません。彼らは神の御子の復活を祝っているのです。それは良いことであり、美しく、聖なるものであり—聖書の信仰の贖われた表現なのです。

ユダヤ人との関係が、公式に破壊された時点で、ユダヤ人に対する教会リーダーの疑問は基本的に「果たしてユダヤ人は異邦人にならずに救われる事があるのだろうか。」というものになりました。教会史全体を通して、その質問に対する答えとしては、ユダヤ人はまず自分の文化遺産と共同体を捨てて、教会での新しい信仰表現を受け入れなければ、神との関係に入ることはできないというものでした。ここでの問題は、教会の新しい信仰表現ではなく、ユダヤ人信者によるユダヤ表現の拒絶とユダヤ人を呪った事です。

キリスト教がヨーロッパ北部に広がった時、それは長い暗い冬と長い昼の続く夏がある地域に到達しました。そこでの年間での二つの主なお祭りは夏至と冬至でした。スカンジナビア半島全体で、冬至祭はバイキングの神ユールから命名されています。その祭りはユールに対する血の犠牲も

含まれていました。年の一番短い日が終わった翌日に、人は常緑樹を切り倒し家に持ち帰り、そして冬の最も暗い日が過ぎ、太陽が戻りすべての緑の草木がそれに伴う(太陽の誕生)事を祝いました。彼らはユールの祭壇に豚をささげ、その犠牲の肉を家に持ち帰って食べました。イースターの時のように、この祭りも新しい意味を持ちました。それはイエシュアの誕生を祝うものに変形したのです。

イエシュアの福音がヨーロッパ中に広がる中、それが人々の文化の中に入って行きました。彼らはそれが「鉢植えされた植物」の信仰として受け取りませんでした。それよりかは、福音の種が彼らの固有文化の「土壌」の中に植えられました。彼らの中で新しい命が芽生えました。根が新しい土壌で伸びて成長しました。

ここでまた、現代の真にキリストを信じるヨーロッパのクリスチャンはクリスマスまたはイースターを祝っていますが、彼らは偶像を礼拝していません。彼らはイエシュア、神の御子の誕生を記念しているのです。それは聖書的信仰の美しい贖われた表現なのです。

ヨーロッパ人はすぐにそのメッセージをアフリカやアジアに持って行きましたが、最初の使徒達の例をたどることに失敗しました。彼らは自分の文化を持って行き、自分たちが派遣された地においてそれを負わしたのです。彼らは言いました。「あなたがたの文化は異教である。あなたは神の文化が必要である。あなたがたは私たちの文化が必要である。」そして彼らは自分達の文化で行われている祭礼等を教えて行きました。それにはヨーロッパ文化の贖われた信仰表現が含まれていました。贖われてはいましたが、それはまだ異質で不適切な(冬至祭であったクリスマスと春の祭りであるイースター)ものでした。これらの異質な習慣はまたヨーロッパ文化のやや贖われていない

表現も多く含まれていました。問題は、これらの文化的表現が福音そのものと混乱した事です。福音を示された側の人は、大抵そのメッセージを包む文化的な荷物によって目くらまされ、メッセージを見極める事が不可能なのです。もちろん、別の重要な問題は、ヨーロッパ人が訪問した先の人に対してあまりにも頻繁に取った行動は決して「福音」ではなかった事でした。聞き手に対する彼らの罪深い行動は、彼らの言葉よりもより大きな声を発しています。

多様性を尊重する

東南アジアで働く聖書翻訳者について聞いたことがあります。彼は新約聖書をデルタ域(訳注:メコンデルタ地域、ベトナムのメコン河下流の三角州付近)に住む部族の言語に翻訳していました。毎年雨季になると河の水位が上がって洪水が起こります。この部族の人々は自分の家を支柱の上に作り、それによって洪水が彼らの家の下を通り過ぎるようにしています。

翻訳者がマタイ7章に来た時、彼は難しい問題に直面しました。章の最後に賢い人が家を岩の上に建て、愚かな人は砂の上に家を建てる話が出てきます。問題は、この文化では、もし岩の上に家を建てると、洪水によって家が流されてしまうという事でした。この部族の賢い人は、自分の家を砂の上に建てます。それは、彼は砂深く支柱を沈めて家をしっかり建てるからです。

翻訳者はこれをどう翻訳したらよいのか、よく分かりませんでした。「賢い人は砂の上に家を建て、愚かな人は岩の上に家を建てる。」と言うことができるでしょうか。それは原文に対して忠実ではありません。そこで、彼はもう少し考えました。彼はそれを「賢い人は良い土台に家を建てました。」そして、「愚かな人は悪い土台に家を建て増した。」と翻訳しました。これは原文に対して忠実で、読

み手が自分で解釈する余地を与えます。翻訳者は、原文の真理を、読み手の生活の中で適切に伝えられるような方法を編み出しました。

多くの宣教師は、賢い人は岩の上に建てるという事について、独善的に主張してきた事でしょう。彼らはこう言ってきました。「私の聖書ではこう書いてあります。」そして、「私の主は昨日も今日も、永遠に同じです。」そして「私の神は嘘つきではありません。」上記の聖書翻訳者のようではなく、派遣された先の人々に対して御言葉の真理を伝達するのに失敗してきたのです。

私たちの父祖の伝統を尊重する事に素晴らしい価値があります。そのような伝統が聖書の原則に反しないのであるならば、守るべきであります。それらは、聖書に加えて、聖書の範囲を超えるかもしれませんが、それが聖書の原則に反しないならば良いかと思えます。その実践は見た目異なったものかもしれませんが、聖書と同じ原則であるならば、守るべきでしょう。

エレミヤ書の35章に、神殿で、ある家族が預言者エレミヤから、父祖の命令とは違う方法を取るよう命じられたのにもかかわらず、父祖の命令を守ったという、強力な例が載せられています。この家族は人々や神殿は脅威とはなりません。そこで主はエレミヤを通して語られました。

エレミヤはレカブ人の家の者に言った。「イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『あなたがたは、先祖ヨナダブの命令に聞き従い、そのすべての命令を守り、すべて彼があなたがたに命じたとおりに行った。』それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『レカブの子ヨナダブには、いつも、わたしの前に立つ人が絶えることはない。』」(エレミヤ書35:18-19)

ヨナタブが息子達や子孫に命じた事は聖書の要求ではありませんでした。それらは聖書の範囲を超えていました。しかし、主は大いに父祖の命令を守った子孫達を尊重したのでした。

私は一度、ユダヤ祝祭日にあるクリスチヤンの牧師から魚釣りに誘われました。私はそれを断り、今日は私の祝祭日の一つだからだと答えました。彼は笑い、例外を設けるよう提案してきました。祝祭日は私にとって重要なので、私はそれを逃したくないと答えました。すると彼は催促し始め、もし魚釣りのために例外を設けられなければ、律法主義に囚われているんじゃないかと言い出しました。私は、彼がクリスマスをお祝っているかと質問で反論しました。

「もちろん祝っているよ。」彼は言いました。私はそれに対して例外を設けて逃した事があるかと質問しました。

彼は困惑して「いいや。」と答えました。「すると、あなたは人生の中で毎年クリスマスをお祝って、一度たりとも例外を設けた事がない、という事ですね。」と私は尋ねました。

「ええ、そうですよ。」と彼は答えました。

「へえ！それは私には束縛のように見えるねえ。」

彼はさらに困惑して、私を見つめるばかりでした。

「でも、そうじゃないんでしょう？」

「ええ。」彼は答えました。

私はさらに続けました。「それは恐らくあなたにとって、大好きなお祭りでしょう。あなたが楽しみにしているんでしょう。」

「その通りさ。」

「それは、あなたの家族が集まって贈物を交換する時ですね。あなたは、自分の愛と神の愛を友達や親戚伝える時でしょう。他の事はすべて横に置いておいて、一緒にいることを単純に楽しみますよね。あなたは笑い、冗談を言って、物語を語り、歌を歌い、互いの近況を知らせあうでしょうね。あ

なたはその祝祭日の出来事や、それに関するすべての特別な事を、皆で共有するでしょう。そして、恐らくあなたは時間を取って、神に感謝を捧げるでしょう。」

「ええ。そうです。」

「それでね。」私は言いました。「私の祝祭日もまったく同じです。それは決して重荷ではありません。それは祝福なのです。私がそれを守るのは、それらに意味があり楽しむからなのです。私は強制されて行うものではありません。」

自分の父祖の伝統を私たちは尊重しているでしょうか。私たちは他の人々の、父祖から受け継がれた伝統を尊重しているでしょうか。他の人に贖いのメッセージを伝える時、私たちは自分達の父祖を尊重するように教えているでしょうか。または、恐らく彼らに対して父祖を尊重しないように教えているのではないのでしょうか。

私たちの民と地の贖いを具象化する

被造物は壊れた状態にあります。人類は創造主者と壊れた関係にあり、人類が管理するよう与えられた土地を汚しました。贖いのご計画は創造主が被造物をご自分のために回復させる事です。創造主はそのご計画を、主が私たち(ユダヤ人)に与えて下さった文化的遺産を通して、イスラエルに伝えました。主の御子イエシュアは私たちと共に生活し、その遺産と神のメッセージを完全に具象化していました。イエシュアは彼が生まれた土地を尊重し、主と共に生きた人々を尊重しました。御言葉は人となって、私たちの間に住まわれたのです。

最初に諸国から呼び出されたメッセンジャーとして、イスラエルはその目的のため取り分けられましたが、まだ完成に至っていません。それは、イスラエルの運命として残されています。イスラエ

ルはまだ贖いのメッセージを運ぶよう、呼び出されているのです。

メシアニック・ジューとして忠実にユダヤ文化遺産を守ることは、私たちの元の、そして究極的な国家に与えられた目的と召命に連結するのです。それを守れなかったという事で、神と分断されるという事はありませんが、民族として維持する目的で忠実に働いている共同体の外に私たちは置かれてしまいます。何世紀にも渡る離散の中で、独自の民族として維持できた伝統の例として、シャバット(安息日)とカシュルート(食物の清浄規定)です。私たちがそれら二つを守ってきた以上に、それらが私たちを守ってきた一私たちを維持してきたのです。離散の間、それらが私たちを他の民族とは違うものとして分けてきました。主はこれらの事を通して、ご自身の目的のために私たちを維持してきました。

南半球によく発達したユダヤ共同体がいくつもあります。赤道の下では、北半球と季節が逆転します。北半球の春は南半球の秋になります。南半球のユダヤ共同体がヘブライ歴とイスラエルの季節に応じてイスラエルの祭りをを行う時、イスラエルで祝われるのと逆の季節にお祝いします。ニュージーランドのユダヤ人は、春の例祭である過越の祭りを、離散の地の収穫期にお祝いします。彼らは収穫祭である仮庵の祭りを、離散の地の春にお祝いします。そうすることによって、イスラエルの歴史と自分の歴史と将来のつながりを表現しているのです。彼らは自分の父祖を尊重していません。彼らは共有するユダヤ人の歴史とその運命に同一視しています。彼らが今住んでいる土地の人ではない事を、彼らは表現しているのです。

イスラエルの例祭を守らなければならないとマオリ族の人に教える事は、彼らの父祖と土地を尊ばない事になるのです。それは、彼らが何者であり、どこに住んでいるか、という事と衝突してしまうの

です。離散の地にいるユダヤ人共同体が、自分の過去や将来のつながりとして伝統を守るなら意味は通ります。しかし、それをニュージーランドの他の共同体に強制することは場違いになります。もし、イスラエルの例祭を記念したく参加するのは自由ですが、しなければならない事はまったくありません。ユダヤ人と合わせるという意味において、それらの伝統を分かち合う事、または単純に学びとして経験する事を、自由に選ぶことはできます。しかし、それらを自分の表現として単純に取り入れる場合は、やや場違いになるでしょう。自分の土地や父祖を尊重するために、自分の地と歴史の表現を守る方がより良いでしょう。

ローマ書11章で使徒パウロは、イエシュアに従う異邦人は切り落とされた野生種のオリーブの枝が、栽培種のオリーブに接ぎ木されたというたとえを用いています。複数のオリーブの枝が切り落とされ、それを一つの新しい木に接ぎ木された時、それぞれの枝は、元の木のオリーブの実、独自の色と味を持つものを実らせません。違いは、それらの枝は新しい根から命を与える栄養をもらい始めるという事です。その根がより強く、より良いものならば、枝は十分に実をならすことができるでしょう。それはまだ同じ、その枝独自の実を実らせませんが、より高い品質で、より多く実らせる事ができるのです。

ローマ書11章にある栽培種のオリーブの根は、ユダヤ共同体ではありません。それは、イエシュア本人なのです。彼こそが根であり、そこから私たちは命を与える栄養を受けます。諸国にいる信者達は「挿し木」で、イエシュアを通して命を与える栄養を受けています。私たちが部分をなすこのオリーブの木は、1種だけのオリーブの木ではありません。多くの木から挿し木された木なのです。この木は多くの種類のオリーブの実、様々な色、味、感触や香りを持つものです。あるものは油を取るのに向いており、あるものは漬物に向

いています。それらはすべて加工され異なった方法で出されます。より良い根から命を与える栄養を受け取る事によって、私たちは全潜在能力に到達するのです。私たちそれぞれの実は固有のもので、その実りはよりすばらしく、より高品質なものとなります。



全世界のメシアの体は色と味と音の交響曲です。私たちは主にあって一つですが、多様のままです。一致とは同一である、という事ではありません。私たちは、ご自分のメッセージの通り生きられた神の御子に似るようにしつつ、自分の民族の多様性を祝うべきなのです。私たちが、自分の民の中で、共同体の一員として十分に生活し、それぞれが主のメッセージを生きることができますように。他の民に対して、彼らが何者であり、どこに住んでいるか、そこでのやり方に応じて、彼らが主のメッセージを生きることができるよう、私たちが求める事ができますように祈ります。

引用文献

聖書の翻訳文は「新改訳聖書」

(*Nicene and Post-Nicene Fathers, Series II, Vol. XIV: The Seven Ecumenical Councils.*
Edinburgh: T & T Clark, 1980.)

Gavriel Gefen

P.O. Box 1833

Jerusalem, 91017

ISRAEL

Tel. +972-2-5671951

Fax: +972-2-5617536

E-mail: gavriel@shlichut.com

Web site: www.shlichut.com

ケレン・ハ・シュリフトへのご献金は:

郵便振替口座 00130-0-314527「シオンの喜び」芝
郵便局内

(連絡先)事務局住所 〒144-0051 東京都大田区
西蒲田4-24-10 Tフラット203

「シオンの喜び」河野由輝代 宛

電話:090-1802-6190

ゲフェン師のメルマガのバックナンバーをお読みに
なりたい方は、下記URLをご参照下さい。

<http://www.eonet.ne.jp/~welcomehome/gefen/gefenindex.htm>